

鼎談「図書館の現状と改革の課題—図書館職員の地位向上をめざして—」

## 発言要旨

一般社団法人北海道ブックシェアリング代表理事 荒井宏明

本日のフォーラムのテーマ「図書館職員の社会的地位の向上と図書館改革」についての情報提供あるいは問題提起として北海道の読書環境、特に学校図書館に関する現状と課題を報告します。

読書環境というものを具体的な施設で挙げると①公共図書館②書店③学校図書館の3つが挙げられます。北海道はいずれも深刻な状況にありますが、公共図書館の有無や整備はそれぞれの自治体や議会、そして書店の出店・閉店はマーケットが判断するものです。一方、学校図書館は学校図書館法によって、整備され、児童生徒の学びに寄与することが義務付けられています。ところが北海道においては学校図書館の課題が最も懸念されるという状況にあります。

北海道の小学校の学校司書の配置状況は24.8%（全国平均は69.1%）で全国ワースト3位、中学校は33.9%（同65.9%）で全国ワースト8位、高校は6.2%（66.4%）で全国ワースト2位です。高校の学校司書の配置は現在、31都府県が90%以上（うち22都府県が100%）であることから、6.2%という数字は大きな問題です。

北海道の児童・生徒の3分の1を占める札幌市を除くと

小学校 24.8%→34.4%

（札幌市は小学校に学校司書を配置していないので、10ポイントほど上がります）

中学校 33.9%→23.4% （逆に中学校は10ポイント以上下がります）

高校 6.2%→4.7%

本日のテーマに関連する雇用体系をみますと

小学校 常勤12人 非常勤246人

中学校 常勤3人 非常勤113人

高校 常勤20人 非常勤0人

特別支援学校・義務教育学校・中等教育学校 計117校 常勤1人 非常勤9人となります。

文科省の2007年の調査では、北海道の学校図書予算の措置率は小学校で45.7%、中学校で40.8%と本来の予算額の半分以下（ともに全国ワースト2位）しか使われていません。文科省がビジョンやガイドラインを示す。そして間がすっぽり抜けて現場の努力や創意工夫に委ねられる。そういった状況が長年続いています。制度設計や意思決定、運用についての点検と再整備の必要性を強く感じます。